日本史史料研究会　　令和２年６月 20 日発行

水道橋倶楽部

No.1

水道橋倶楽部とは

歴史史料を調査・研究し、その成果の公開を目的とする団体「日本史史料研究会」の水道橋研究センターでの活動紹介を中心に情報を発信します。　http://suido.ashigaru.jp/suidobashi

<講座案内>　日本史史料研究会では、各種講座を開催しています。

※詳細につきましては、本会ホームページでご確認下さい。
※会場の都合上、参加のご希望に添えない場合があります。

✿ 戦国時代の足利将軍の文書を読む／講師：木下聡

参加費 2,000 円（会場費・資料代）

戦国時代の室町幕府将軍、十五代足利義昭の出した文書と関連史料を読みながら、この時代の室町幕府将軍の政治的役割と、各地の大名とどのような関係を構築していたかを見ていく。

✿『高野春秋』を読む／講師：村上弘子　参加費 700 円（レジュメ代等）

少々専門的な勉強会です。高野山史や真言宗史等の宗教史に興味がある方の参加を歓迎します。

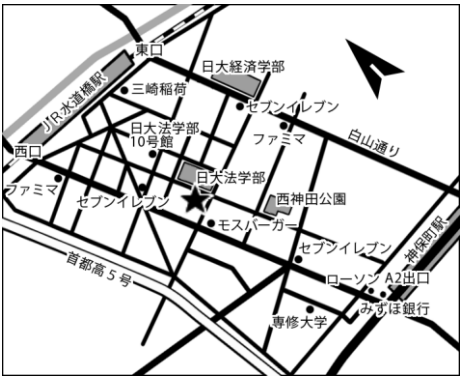
✿『薩戒記』を読む／講師：中元幸二　参加費 2,000 円（資料代）

室町時代の武家伝奏を務めた中山定親の日記を読みます。漢文を読むをことを主眼に据えながら、朝廷と幕府の政治状況を考えていきます。

✿ 研究史を読む会／講師：輪番

参加費 300 円（資料代）

現在は、石母田正『中世的世界の形成』（岩波文庫）を読んでいます。史学史の流れを勉強する会です。



※講座への参加申込は、当日会場でも受付けますが、資料準備の都合上、なるべく前日までにご連絡をいただけるよう、お願いします。

nihonshi-shiryou@nihonshi.sakura.ne.jp
090-3808-1260

日本史史料研究会 水道橋研究センター
〒101-0061
東京都千代田区神田三崎町 2-4-13
コンポラビル 202
水道橋駅徒歩4分、神保町駅徒歩6分

前回の講座では

☆ 戦国時代の足利将軍の文書を読む 第67回　（令和２年２月２日）

『毛利家文書』などに収録されている翻刻史料を読んでいます。

和様漢文が苦手な方も読み方から時代背景まで幅広く学べます。中世の言葉を通して世界を広げてみませんか？

九州国立博物館特別展にて
足利義昭坐像（京都等持院蔵）

京を追われて紀伊国由良へ下向した足利義昭。織田と毛利の支配領域が接した事から両者の関係が悪化し始める。天正４年、義昭は毛利領である備後国鞆へ下向した。勝手に将軍が来たことで織田への不信を募らせ、毛利輝元は将軍の上洛要請を請けた。水軍衆を派遣し雑賀衆と共に木津川口で織田方の水軍衆に大打撃を与えた。

一方義昭は、東国に対しては上杉・武田・北条の和睦を画策する。上杉も織田と支配領域が接したことで関係が悪化。北陸も風雲急を告げる…。

（安江）

☆『高野春秋』を読む 第134回　（令和２年２月16日）

貞享二年臘月のこと。『高野春秋編年輯録』（以下『高野春秋』）を記すにあたり、著者懐英は師である宥算に、作成した凡例規則を送りました。宥算は懐英の優れた師であり『高野春秋』を記すことを勧めた人物でもあります。

懐英の志に感銘した宥算は『高野春秋』の成功を確信しながらも、高野山内で散り散りになっている書物を集め選別し編んでいくことの難しさと、その中でも正しく通史を記載すべきことを説きました。

今回の講座では、著者懐英が『高野春秋』をどう書こうとしていたのか、を学びましたが、今後は本文に戻り16世紀に入っていくようです。登場する人々に共感したり、首を傾げたりしながら楽しく高野山と周辺の歴史が学べる講座です。

（Yminako）

史跡探訪　岐阜城

斎藤道三の居城でもあり、織田信長が懸造りの美しい御殿を作った城。細川藤孝らが信長から義昭帰洛の助力を得るために訪れた城。関ヶ原の合戦では一日で落城した城。

信長は天守と山麓の居館を往復したらしいので、体験しようと大手道と考えられる七曲登山道を登りました。道は整備されていますが、山は山。

信長は毎日ここを往復してたのか。なぜ…？山麓の居館に住めばいいじゃない

…招かれても天守へ案内されたくないと考えながら登ること一時間、山頂に到着。

そこには美濃を一望でき、国を手に入れたという実感が涌く風景が広がっていました。ここが歴史の分岐点のひとつなんだと思いを馳せて、百曲登山道から下山しました。

この道しんどい！

（坂口）

『夢中問答集』凡解
その１

生駒哲郎

はじめに

『夢中問答集』は、足利尊氏の弟直義の仏教に関する問いに、夢窓疎石が答えたものである。刊本としては、川瀬一馬校注･現代語訳の『夢中問答集』（講談社学術文庫）があり、誰でもが読むことができる。講談社学術文庫本は夢窓在世中の康永三年（1344）刊行の五山版を底本にしており、本稿もこれによっている。

本稿では、全九十三の問答を一問答ごとに現代語訳と解説を加えることにした。中世における武士の信仰を探ってみようとの趣旨からである。その内容を知っておくことは、もしかしたら、宗教史に限らず、中世全体を考える上で役に立つかも知れない。

なお、現代語訳の改行は筆者が勝手に行った。

一　現代語訳

（一）今生（こんじょう）の福報（ふくほう）　附　須達長者（しゅだつちょうじゃ）の福報

問う。衆生の苦を抜きて、楽を与えることは、仏の大慈大悲である。しかしながら、仏の教えのなかで、人の福を求めるのを抑制することは、何故であろうか。

答える。世間に福を求める人は、あるいは商（しょう）買（こ）・農作（わざ）の業を営み、あるいは利銭（りぜに）売買のはかりごとを巡らし、あるいは工芸・技芸の能を施し、あるいは奉公・給仕の功をいたす。それ業（ごう）というものは、各々異なれども、その志はみな同じである。

そのありさまを見ると、生涯においてただ心身ともに苦労するばかりで、その志のように求め得る福はない。そうしたなかでも、たまたま求め得て、一旦の楽しみがあったとしても、あるいは火に焼かれ、水に流され、あるいは賊人に取られ、官人（役人）に奪われる。たとえ一生の間、このような難に遭わなかった者も、報命（ほうみょう）（寿命）が尽きる時、その福が身体についていくことはない（福を来世には持っていけない）。福が多ければ、罪もまた多いはずなので、来生（らいしょう）（来世）には必ず悪道に入るであろう。

小利大損とは、こういうことなのではないだろうか。今生に貧人となったことは、前世の慳貪（けんどん）の業の報いである。このような理を知らないで、あるいは世を渡るはかりごとが拙いので、貧しき人がいると思ってしまう。もし、前世の福因（ふくいん）がなければ、たとえ世を渡る様を、さまざまに習って、そのとおりに振る舞ったとしても、貧より福分が勝（まさ）ることはないのである。

まさに知るべきである。世渡（よわた）りのはかりごとが拙いが故に貧しいのではない。ただこれ福分がないが故に、世を渡るはかりごとが拙いのである。

あるいは我が身が貧しいのは、給るべき御恩を給らなかったからだと主人を恨む人がいる。あるいは自分が治（おさ）めるべき所領を、他人に奪い取られたがために、貧しくなったと腹を立てる人がいる。これもまた、御恩を蒙らず、所領を奪われたから貧しいのではない。貧しくなる業報によって、給るべき御恩を給らず、治めるべき所領を治めることができないのである。

そうであるから、つまるところ、福を求める欲心をせめて捨てられれば、福分は自然に満たされるであろう。こういう理由で、仏の教えでは人が福を求めるのを抑制するのである。福を求めないから貧しいのではない。

昔、須達長者は、老後に福報が衰えて、世を渡る計略も尽き果てて、年来の眷属が一人もいなくなってしまった。ただ夫婦

二人だけになった。財宝はないけれど、かつて裕福だったので空の倉はたくさんあった。須達はもしかしてまだ何かあるのではと思い、倉の中を探すと、栴檀で作られたたいそうな升を一つ得た。須達は、この升を米四升と交換すれば、二、三日命を繋げると嬉しく思っていた。

須達は別の用事があり、他のところに行っていた。須達が留守にした後、舎利弗が須達の家にやってきて乞食(托鉢)をなされた。須達の妻は、四升の米のうち、一升分を与えて舎利弗を供養した。その後、目連と迦葉が来て乞食をした。妻は舎利弗の時と同様、二人に二升を奉った。四升の内、残り一升になった。妻は、これだけだったら、今日ばかりの命を繋ぐことができると思っていたら、今度は釈迦がいらっしゃった。妻は惜しむ理由はないとして、釈迦を供養し奉った(残りの一升を与えた)。

妻は、さても、須達は外へ出ているが、疲れきって帰ってきた時にはどうしたらよいだろうかと思うと悲しくなり、また、仏僧を供養するにしても、時と場合により、「我が命、繋ぎ難き時に、四升すべてを奉ることはないであろう」と、須達に叱られるのではと浅ましく思えて、泣き伏していた。

しばらくすると、須達が外から帰ってきて、妻が泣き伏しているのを見て、不思議に思いその理由を聞いた。妻はありのままを答えた。須達がこれを聞いて言うには、「三宝(仏教)の御ために身命を惜しんで奉ることがあってはならない。ただ今、餓死しようとも、どうして、我が身のためとして、物を惜みながら奉ることがあるだろうか」と、須達は妻の話をありがたく思うと言って感歎した。

須達はその後、「もしまた、この間のように升風情の物でもあるのでは」と、空の倉に入って物を探そうとすると、(数ある)倉ごとに、その戸が中に何か詰まっているようで開かなかった。須達は不思議に思ってその戸を打ち破って中を見ると、米・絹布・金銀等の種々の財宝が元のように面々の倉に満ち満ちていた。その時眷属も再び集まり、須達は元の長者に戻った。

このように福分がまた来たことは、須達に、四升の米の代わりとして、仏が与えたものではない。ただこれ、須達夫婦ともに無欲清浄な心中より集まって来たものである。末代ではあるが、もし人がこのように無欲であれば、無限の福徳がやがて満足するであろう。たとえ生まれつき、このような心がなかったとしても、小利を求める心を翻して、須達夫婦の心に学べば、どうして大利を得られないことがあろうか。須達の心を学ばずして、ただ須達のように楽を得たいと思って、欲情のまま福を求めれば、今生に求める大利が得られないばかりでなく、来生は必ず餓鬼道に入るであろう。

二　凡解

① 福とは

「衆生」とは、仏菩薩が救いの対象とする者のことである。この世に生きているすべての人間は仏菩薩にとって衆生である。足利直義の質問は、仏菩薩の大慈悲のなかに、衆生の苦を抜き、楽を与えるとあるのに、仏の教えのなかで、人々が福を求めるのを抑制するのは何故かというものであった。

つまり、「楽を与える」ということと、人々が「福を求める」のを禁止することは矛盾ではないのか、ということである。「福」にも色々とあると思うが、ここで言う「福」とは、物理的な裕福さを指す。「富」と言ってもいいのかもしれない。したがって、「福を求める」とは、「物欲を求める」ということである。

夢窓疎石は、まず人々が求める「福」=

「富」は、その思いのとおりにはいかないで、苦労するばかりであろうと述べる。また、仮に裕福になったとしても、火災で焼失したり、水害で流されたり、人に略奪されたりしてその福はすぐに失うということである。さらに、そうした災難に遭わなかったとしても、物欲による福が増えれば増えるほど、仏教ではこの行為を抑制しているので、その分、罪業も増えることになるという。したがって、こうした罪業を積み上げた人々の来世は、往生など叶わず、迷いの世界である六道のなかでも「悪道」に堕ちるだろうというのである。

② 六道の善悪

「悪道」とは、「三悪道」とも言われる。六道は、天・人・修羅・畜生・餓鬼・地獄道からなるが、悪道とは、六道のなかの畜生・餓鬼・地獄道のことである。川瀬一馬氏は、この問答で記された「悪道」について、「地獄」と現代語訳しているが、悪道とはあくまでも畜生・餓鬼・地獄道の三道の総称であり、この話でも地獄のみを指す言葉ではない。このことは、最後に「来生は必ず餓鬼道に入るであろう」と結ばれていることとも関連するので後述する。

ちなみに、六道のなかには悪道もあれば、善道もある。「善道」は「三善道」とも呼ばれ、天・人・修羅道の三道を言う。六道にも善・悪の区別があった。とはいえ、六道はしょせん迷いの世界である。迷いの世界のなかの善･悪を分ける基準は何であろうか。

それは、仏教を修することがそもそもできるかどうか、であった。善道である人の世界は、六道とはいえ、寺院や経典もあり、僧もいて仏道に入る機会があり、発心(ほっしん)できる。それに対し、悪道はまともに仏教を修すことができないと考えられている世界である。したがって、仏道に帰依するきっかけがそもそもないので、次の世もまた次の世も六道のなかでも悪道を輪廻転生するという悪循環に陥ることになる。つまり悪道は出離解脱が善道よりも難しいと考えられている世界なのである（ただし不可能ではない）。この区別は、中世仏教を考える際、けっこう重要な問題である。

③ 欲心による福､無欲清浄心による福

さて、夢窓は、福を求め、それが叶わないことについて、この世の業(ごう)とばかりは考えていない。前世の業が現世に貧人となって現れると考えている。つまり、この世の貧は､前の世に慳貪(けんどん)(ケチ)だった結果だというのである。したがって、人が色々と手を尽くし頑張っても福分が貧分を上まわることはなく、苦労するばかりで、やめた方がよいというのが夢窓の結論である。

すると、夢窓は、物理的な裕福さを全面的に否定しているのか。いや、そうではない。夢窓は、「福を求める欲心をせめて捨てられれば、福分は自然に満たされるであろう」と述べている。何か話が難解になってきたようだが、夢窓は続けて須達長者の話を例として挙げる。

須達長者は、大富豪であったが、その福報が尽きて貧人になったという。それでも須達長者とその妻は、生きるための米を釈迦の十大弟子のなかの舎利弗・目連・魔訶迦葉に施してしまう。さらに釈迦にも米を施し､夫婦の食べる物が尽きてしまう｡すると､空っぽだったはずの倉が､財宝でいっぱいになっていたという。

これは、夫婦が施しをしたお礼に釈迦

が与えたものではなく、夫婦が真に仏に帰依し、無欲清浄な心中だったがために、自然と福が集まってきた結果だというのである。

つまり、仏に帰依する無欲清浄な心があれば、生きるために必要な福は勝手に集まるというのである。夢窓が言う欲心を捨てれば「福分は自然に満たされる」というのはそういうことであり、それは前世の業など関係ない。迷いの世界を抜け出そうと思い菩提心を発せば、前世の業は断ち切れるのである。

④ 須達長者と足利直義

『夢中問答集』は、足利直義の問いに、夢窓疎石が答えるという形式になっている。そのことはけっこう重要で、夢窓が例として挙げた話が、釈迦や阿弥陀など仏そのもののご利益の話でもなく、高僧の伝記などでもなく、あくまでも俗人である須達長者を例としているところに俗人直義を意識していると思われる。

須達長者については、現代ではあまり知られていないかもしれない。須達が関係するものとしては、『平家物語』冒頭の「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり」の「祇園精舎」が有名であろう。「祇園精舎」は、いわゆる在世時の釈迦が拠点とした大寺院のことである。インドの舎衛国（しゃえいこく）にあったとされる広大な境内を有したという「祇園精舎」は、須達長者の寄進によるとされている。

この話は、釈迦在世時の大檀越須達長者と夢窓にとって現在の大檀越足利直義を重ね合わせているのかもしれない。その直義に対して、夢窓は、欲心によって得られない福と無欲清浄心によって得られる福の違いを述べているのである。決して「福」そのものを否定してはいない。

⑤ 欲心と悪道

夢窓は、欲心による福を求め続けると、悪道に入ると述べていたが、欲にも色々ある。妻や子ども、孫などに対する愛情も愛欲の一種とされて、その欲が強いと悪道に堕ちると考えられた。現在では、あまりしっくりこないかもしれないが、妻や子に対する愛情過多になると、例えば、自分が在世時に消費できないほどの富を妻や子のために残そうとしたりするなどと述べられ、ひいては欲が無限大になり、悪道に堕ちると中世では考えられた。つまり、これは身内や親族に対する愛情が元になる欲である。こうした欲によって堕ちる悪道はだいたい畜生道である。

それに対し、自分自身だけの物欲による欲心が元になって堕ちる悪道は、餓鬼道である。自分ばかりが食べて、妻や子に食べ物を与えなかったり、妻が夫や子に食べ物を与えなかったりして堕ちる悪道である。夢窓が述べる「欲心」「欲情」による福とは、自分自身の物欲によるものであり、したがってこの話の最後は、「来生は必ず餓鬼道に入るであろう」と結ばれているのである。

最後にまめ知識として、この第一問答では、「仏教」と記されているが、ここで言う「仏教」とは、いわゆる「キリスト教」や「仏教」などという意味での「仏教」ではない。中世で「仏教」と記されていたら「仏の教え」というような意味である。中世では、同じく第一問答で記されている「三宝」、または「仏法」、「顕密」などが現在で言うところの「仏教」の意味に近い。

参考文献
校注･現代語訳川瀬一馬『夢中問答集』
（講談社学術文庫　2000 年）

『薩戒記』とは!!

いよいよ始まる新講座「『薩戒記』を読む」
『薩戒記』とは、どんな史料でしょう？
講師の中元幸二先生に伺いました。

「京都府立京都学・歴彩館
京の記憶アーカイブ」より

『薩戒記』は室町時代の公家中山定親（応永８年（1401）～長禄３年(1459)）の日記です。欠けている時期もありますが，応永 25 年～嘉吉３年(1443)まで残されています。

日記の時期は、後小松院の院政と４代将軍義持、６代将軍義教の時代に相当しており、定親は、後小松院の信任が厚く、朝廷と幕府の間で奔走し、朝廷儀式の故実について詳しく書き留めています。

室町殿義持が朝廷儀式に参加することで、平安時代以来の朝廷の儀式に変化が起きて来る様子などが見られます。称光天皇・将軍義持の朝廷と幕府を代表する両者ともに跡継ぎが上手くいかない不安定な時期でもあり、講座では日記を読み進めながら、政治状況を見ていきたいと思います。

花押クイズ

この花押は誰のもの？

ヒント：鎌倉幕府の十五代執権。六波羅探題を二度も務めた。この人物が書いた大量の書状は、紙背文書として横浜市の称名寺に伝わり奇跡的に残った。現在は金沢文庫文書として国宝に指定されている。

「京都府立京都学・歴彩館 東寺百合文書WEB」より

花押：自署の代用に図案化された署名。今でいうサインのようなもの。

紙背文書：裏面が再利用された文書。主に典籍や経典、日記などに用いられた事例が多い。

（浮田）

★有志による勉強会を開催しました★

○ 寿永二年十月宣旨を『玉葉』から探る

（令和２年２月 22 日／企画：浮田）

史料画像は「筑波大学附属図書館 マイクロ収集」より

寿永２年10月宣旨とそれに先立つ頼朝の三箇条奏上の関係については、先行研究でも解釈が異なる。

奏上に沿って宣旨されたとする説(河内祥輔氏ら)がある一方、沿っているかは疑問とする説(佐藤進一氏ら)もある。

今回の試みは『玉葉』の当該条を読み、それぞれ腑に落ちる解釈をしてみようというもの。基礎知識不足のため腑に落ちる所まではいけなかったが、後白河陪臣への兼實の義憤、宣旨「随頼朝命可追討」に対する義仲の遺恨など、とても面白く読めた。

やはり一次史料は大切。　（日吉）

日本史史料研究会の本

～日本史史料研究会発行～

日本史史料研究会研究叢書21
『徳川斉昭書簡集
―大阪城代・土浦藩主土屋寅直宛』
栗山格彰・桜井孝子 編著

日本史史料研究会研究選書14
『最新研究 江上八院の戦い』
中西 豪・白峰 旬 共著

日本史史料研究会研究叢書20
『首里当蔵蓮華院出土一字一石経
―球陽三詩僧不羈の事蹟』
下郡 剛 編著

日本史史料研究会研究選書13
『最上義光』 栗野俊之 著

日本史史料研究会研究選書12
『経典と中世地域社会』 加増啓二 著

日本史史料研究会研究選書11
『甲州金の研究―史料と現品の統合試論』
西脇 康 著

日本史史料研究会
フィールドワーク レコード 沖縄 002
『近世琉球寺院の原風景を追う
―石垣島桃林寺の墓碑と三牌』
下郡 剛 編著

日本史史料研究会研究会報
『ぶい&ぶい』（無為 無為）Vol. 30

～日本史史料研究会編著～

『六波羅探題研究の軌跡
研究史ハンドブック』
（日本史史料研究会ブックス003）
久保田和彦 著 文学通信

『「王」と呼ばれた皇族
古代・中世皇統の末流』
日本史史料研究会監修・赤坂恒明 著
吉川弘文館

『初期室町幕府研究の最前線
ここまでわかった 南北朝期の幕府体制』
日本史史料研究会監修・亀田俊和 編
洋泉社

『新 神風と悪党の世紀
神国日本の舞台裏』
（日本史史料研究会ブックス002）
海津一朗 著 文学通信

☆新刊・近日刊行☆

『戦国期足利将軍研究の最前線』
日本史史料研究会監修・山田康弘 編
山川出版社

『関ヶ原大乱、本当の勝者』
日本史史料研究会監修・山田康弘 編著
朝日新聞社出版

7頁のクイズの答：金澤貞顕（かねさわさだあき）

～会員募集中～

日本史史料研究会では、随時会員を募集しています。

http://www13.plala.or.jp/t-ikoma/

☆会員特典☆

- 本会発行の研究書を1割引で頒布。 ※他社の発行物は含まれません。
- 本会主催の研究報告会・講座等への参加費の割引（1割引）。
- 本会が主催する研究報告会等での報告。 等

☆会費☆

入会金1,000円　年会費1,000円（お手続き日より1年間有効）

郵便振込口座（口座番号:00110－8－722491　口座名称:日本史史料研究会）

※詳細につきましては、本会までお問合せ下さい。

編集:yoriko　発行:日本史史料研究会水道橋倶楽部